

六	旅行グループ 〇特産（萩焼，夏みかん） 〇歴史（寺，藩教育，吉田松陰）と方言グループ テーマ別 18班 1班構成 4～12名
---	--

調査の結果 — 問題点

以上の調査は，旅行出発約1か月前のものであるがこの結果から，問題点を指摘すると

1 「研究」の意識変容と生徒の姿勢

本校の研究旅行の性格は，調査五の教材的なものを持ち，奈良方面の旅行を十年間実施，それだけの成果と楽しい思い出をもっていた。しかしこのような旅行についての知識は殆どなく，また興味も少なくなっている。教材や準備が不十分でも，その土地で十分観光を楽めばよいという一現地主義的なものが多い。

日本史を学習せず，上代中古に対する知識，また古典文学への興味の乏しい高2初期の実施にも問題が残されている。

2 旅行に対する興味

従来の近畿地方（京都）への興味は少なくなり，裏日本（山陰，金沢，北陸）の未知の地方への探訪心がコースを選定させている。確かに旅は，未

知への憧がれ，漂泊的解放感をもって，気ままな心をさそう。旅行のテーマも，旅行地から自然と決定されたもの—即物，即地的であり，観光的气氛が濃厚である。

3 研究旅行の指導

旅行の指導は，旅行委員の指導とテーマの指導とに分けて考えてみると

旅行委員の指導 — (調査)

研究旅行が生徒の話題になったのは，昨年11月であり，コースについての真剣な討議がなされるようになったのは本年2月である。昨年度の旅行コースとは違う，山口，山陰コースなのでその研究的性格から言っても，問題視するむきもあったが，教官のコースの事前調査の結果をみて若干の変更を加えて決定した。旅行委員も生徒全体の意向を十分にくみ上げるほど，クラス内での話し合いも行われなかったところもあった。

テーマの指導

テーマの選定やその準備が生徒の自由に任されているため，資料の不足，研究の方法が未熟なためテーマへの取りくみ方が不十分である。旅行がテーマに先行するところに問題があるのであって，この選定や指導には，更にきびしく慎重でなければならぬ。教科担任の指導ももっと積極的であってよいし，この点は，嘗ての「奈良研究旅行」の方法を生かしていきたい。

〔VI〕 林間学校の実際面について

米 田 閏 一

毎年夏休み中の行事として，岐阜県大野郡高根村に建てられた山の家に，中学二年生は2泊3日，高校一年生は3泊4日の山の生活を体験すべくクラス単位で出かける。とここまで聞くだけなら何とも優雅でデラックスな高原避暑ツアーのように思えるのだが，それを計画し，引卒していく担任の精神的及び肉体的負担かつまた責任の重大さというものは筆舌に尽し難いものがある。

林間学校のあり方，意義といったようなことについて今一度十分検討してみる必要がある時期にさしかかっている。学校における諸行事と林間学校行事とのかねあい等から，あるいは学校運営上の教育的実際面からの配慮とあらゆる角度から透視し，さらに現在の社会的環境を考慮して現実に即した機能的で有機的な方

策を打ち出さなければいけない。

それでは具体的にはどのような内容のものであろうかスケジュールにそって述べてみることにしよう。例年の手順として夏休みになって間もなく高校一年生の三クラスがクラス単位で3泊4日の日程でさみだれ式に消化し，一気に中学二年生の二クラスを夫々2泊3日ずつつけていくのである。実際に出かけるのは前述のように夏休みになってであるが，休みに入る前に，これは二，三週間前になるが担任が中心（これが何とこの時期から林間学校が終って名古屋に帰ってくるまでにつくことになる）になって事前指導なるものを行って概要を説明し，それ以後グループを編成させて細かい計画を立案検討していくのである。とにかく学校の山の家なるものは一応山小屋まがいのものがあるもの

の、そこにはキャンプ・リーダーがいる訳でもなく、ましてや食事の面倒見るといったスタッフは皆無である。そこへ40余名ものこれまた余り山の経験のないものをおまけに山には素人の担任が引率してこうというのだから、めくら蛇におじずの感がある。それ故生徒のグループも山での研究を中心としたグループと炊事を中心としたグループとに分れる。そこでまた担任はまったく恐怖とまで言っても過言ではないと思うが、生徒たちの食事の献立にまで顔をつっ込むことになるのである。もうそれはだまっていられないのである。何故って、担任もそれをいっしょに食べることになるのだから……。

夏休みに入ってもあとは出発を待つばかりとはいかない。出発の前日に10食分近い食料の買い出しをしなければならない。これが頂度猛烈に暑い時で大変な労力である。またその割には物が腐りやすいときなので

高カロリーの材料を持っていけないのも問題である。

いろいろ苦勞したあげく現地に到着するのだが、そのまたバスで通る道が、山また山の断崖絶壁で、車のすれ違いも満足に出来ないという地獄の入口では楽しい山の生活どころではない。とにもかくにも無事学荘に着くや否やこれまた担任は神経の休まるときがないのである。やれ食事の用意、やれ入浴、やれ夜のミーティング、夜半は夜半でなかなか静かに寝ない者がかなりいてゆっくり休むことができず、一時たりとも身も心も開放されるときがないということは大きな問題である。

以上林間学校における種々の問題点を述べてきたがまだまだここに取り上げることができなかつた様々の問題点が多々あるが、今後いろいろな学校行事と関連してあらゆる角度から、より良き方向に前進するよう多角的に研究を行いたい。

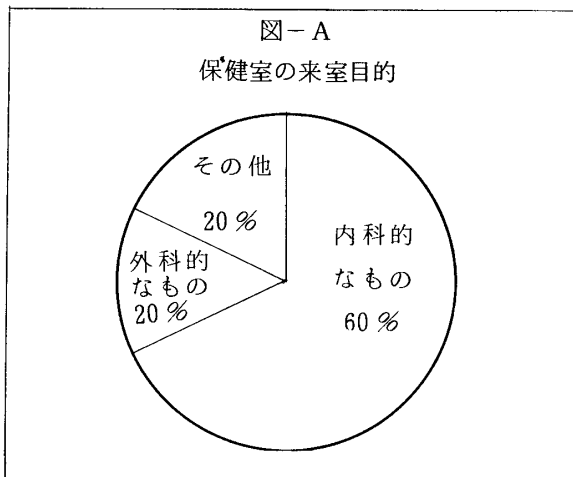
〔VII〕 保健室における生徒の実態について

今 治 富 美 子

I はじめに

保健室では、急病人や外傷などの救急処置を行なう所でもあるので、学校中で一番静かな場所だと受けとられるかもしれない。しかし、本校の保健室は、学校中で一番にぎやかな所ではないかと思う。日によって差はあるが、保健室には一日平均30人前後の生徒がやって来る。それらの生徒を来室の目的から分けると、だいたい3つに分類できる。(1)内科的なもの (2)外科的なもの (3) その他である。

その割合は、図-Aに示す通りである。それぞれにつ

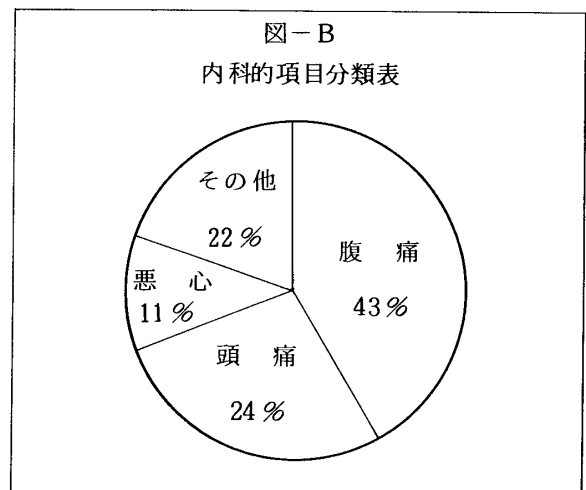


いて気がついたことを述べてみたいと思う。

II 保健室の現状について

(1) 内科的なもの

図-Aでも解るように、これが保健室にやって来る生徒の約60%を占めている。訴える疾病異常は、頭痛、腹痛、悪心などで、その割合は、図-Bに示す通りで



ある。この場合、生徒は1人で来ることは少なく、たいてい2人以上で来る。これは特に女子に多く、中学生に多い傾向にある。生徒達は、「先生、お腹いたい